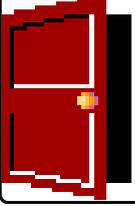


《読書活動の楽しさと大切さを伝えたくて》



読書活動への扉を開く！

桑村小学校 令和4年6月20日 文責 渡邊

第4学年の大熊さんと星さんの詩を紹介します。



【大熊さんの作品の原文】

春

大熊 清菜

春がきた
春がきた
あたたかくなってきた
春がきた
春がきた
菜の花 桜 チューリップが
さいている
春がきた
春がきた
新一年生が花を見つめている
春がきた
やっぱり春がスタートだ



【星さんの作品の原文】

春の鳥

星 希心

うぐいすが鳴いたら
つばめがつられて
こんにちは
ほかの鳥もつられて
こんにちは
あたたかくなりましたね

大熊さんの作品も星さんの作品も言葉とともにかわいい絵が描かれています。とても素敵な作品です。(この他の4年生の作品もとても素敵でしたが紙面の都合で、2人の作品を紹介しました。)

子供の感性は、とても素直な描写で現れます。そうした感性を私たち大人は認め、引き出していくことが求められるのではないのでしょうか。

豊かな感性は表出することにより磨かれていくものと思います。

図書の分野には、「詩」があります。今回は、「もっと楽しくなる詩の読み方」(詩人谷川 俊太郎氏)を紹介します。

言葉の芸術のなかで、詩はいちばん自由なものです。ふつうの文章のように、ひとつのことを伝えるためのものではありません。だから、家電のトリセツみたいな気持ちで読みはじめると楽しめなくなってしまいます。

詩というのは、意味がひとつではなく、たくさん重なっているものです。だから、読んでいてよくわからないということもあるでしょう。でも、それでいいんです。読んでみて、「なんか、いいな」と感じるだけでいい。作者だって、一篇の詩についてひとつの答えをもっているわけではありません。

詩を読むときに、理解しなきゃと思うと、それが詩に近づこうえで邪魔になってしまいます。みなさんが歌を歌ったり音楽を聴いたりするときは、そんなことで悩んだりはしないでしょう。詩も同じように考えてみてはどうだろう。詩は目で読むだけではなく、声に出して読んでみるのもおすすめです。詩は音楽の性質ももっていますから、声に出して音も楽しむほうが詩の意味に通じると思うんです。

とにかく、楽しければそれでいい。よくわからないけれどちょっといいな、と思ったものはそのまま置いておけば大丈夫です。もしかしたら、来年わかるかもしれないし、大人になってから思い出して、胸がいっぱいになるということもあるかもしれません。詩って、そういう不思議なことが起こるんですよ。

いかがでしたか? 「詩」って特別なものではなくて、歌を聴くような感じで読んでみるのがよいというアドバイスに、「なるほど」と納得しました。

さて、ここで前回、保護者の方から町立図書館に行く際のカードの所持の仕方についての質問がありました。このことについて、2年生の保護者の方から意見をいただいたので紹介します。

我が家は、図書利用カードは、100円ショップで購入できるパスケースまたは、IDケースに首から提げられるストラップを付けて、持ち歩いたり、保管していますよ。また、図書館で借りた本を入れる専用のバッグを作り、図書館にはそのバッグと中にパスケースに入れたカードを持ち、通っています。(2年生保護者)

上記のご意見にあるように、ストラップを利用して身に付けておくのはよい方法ですね。落としたり、置き忘れてたりすることを防止するには、身に付けることが対策としては有効であると私も思います。アドバイスをありがとうございました。

----- 切り取り線 -----

「読書活動の扉を開く」(6月20日号)を読んでの感想

()年()